

## 絵画の人 中島 敬朝

下田出身の画家に中島敬朝さんがいます。明治三十一年下田の水戸で生まれました。本名は、盛吉といい、幼い頃から絵の上手なお母さんの影響を受けていたようです。

大正十一年、京都市立絵画専門学校に入学し、本格的に日本画を学びました。大正十四年には国展に入選するほどになりました。昭和二年に、絵画専門学校を卒業します。この年に、下田で個展を開いています。その後は、京都に移り、次々とすばらしい作品を描き続けます。

昭和二十年三月、太平洋戦争が激しくなり、京都から一家で郷里下田に疎開し、終戦を迎えることになります。

終戦後は、下田や高知市などで個展を開くなど、絵を描き続けていましたが、昭和二十八年、病気になり、胃の大手術を受け、一家の希望であった京都へ帰ることができなくなりました。

その後、香美群岸本町や赤岡町に転居して絵を描き続け、高知大学の講師をしながら県展や中村市展の審査をしました。県展の審査は、実に十七回を数えるほどに至っています。

昭和五十七年、野市町に家を新築し、日夜絵を描くことに没頭する日々が続いたそうです。昭和五十八年八十四才で、世を去りました。

元高知大学教授の筒井広道さんは、中島敬朝さんについて次のように、記しています。「・・・中村市の下田が中島敬朝さんの郷里であることを知ったのは、中村市展の時であつた。それも、審査後の懇親の会が終わって帰ろうとすると、これから下田へ行つて泊るからといって別れたことがあつたからで、その時のことがいまだに記憶に残っている。そのことがあつてから、下田と中島さんの作品とがみように重なり合う。中島さんの初期の作品を見るとがっちりと組みたてられて、描写は克明できびしい。その写実性が、晩年では装飾性を帯びてきて、形や色の造形的処理は鋭く、感覚的となり、膨らみの表現情感を漂わす。この変容は、中島さんの柔軟な絵画思考に基づいて展開したものと思える。華やいで伸びやかな画面の中に、素朴さ寡黙さが感じられる」

地元の下田で敬朝さんの作品を持っている方も多く、下田小学校の相談室にも敬朝さんの作品が飾られています。



